

1 主題設定の理由

(1) 生徒が生きる未来

第3期教育振興基本計画では、2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項として次の点を挙げている。

- ① 個人では自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成を図る。
- ② 社会では一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会（地域・国・世界）の持続的な成長・発展を目指す。

また、「超スマート社会（society 5.0）」の実現に向けた技術革新が進展する中「人生100年時代」を豊かに生きていくために、若年期の教育、生涯に渡る学習能力向上が必要であると述べている。さらに教育を通じて生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」を最大化することを今後の教育政策の中心に据えて取り組むこととしている。

では、society 5.0を生きることになる現在の中学生に必要な資質・能力どのようなものか。新学習指導要領では、国語において育成することを目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また、答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして、以下のように示している。

（知識・技能）

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力・人間性等）

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

これらは、新学習指導要領国語科の領域、指導事項の構成に反映されており、未来社会を支える人材として必要な資質・能力が、新たに「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」として示されている。

中でも、「学びに向かう力」については、従来、国語への関心・意欲・態度とされた部分だが、「積極的」に学習に取り組む態度ではなく、自らの学びを実現していく「主体的な」学び手としての能力を育成する

ことを目指している。

一方、周知のとおり、今年度は4月当初より新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、世界は大きく変化している。人々の心身の健康状態の悪化、経済的損失、人間関係の喪失等、深刻な状況は、依然として継続している。流行は、まだまだ終息する状況ではなく、今後もいつになったら以前のような生活が送れるのか見通しが立たない状況である。

学校においても生徒の安全健康を第一とした運営が進められ、従来のような濃密なコミュニケーションを前提とした学習を行うことはできていない。今後の状況の変化にもよるが、今置かれた状況の中で、従来のコミュニケーション方法を改善したり、新たなコミュニケーション手段を見いだしたりしながら、生徒の学びを保障していくことが求められている。

国語科教育においても、従来のコミュニケーション活動を重視した言語活動の充実に加えて、例えば本校が6月に導入したクラウド型コンピューティングシステム「Google work space」や、双方向会議ソフト「ZOOM」等を導入し、対面しなくても学ぶことができるオンラインを活用した学び等、新しい学びを実現していかなければならない状況である。

(2) 前研究の成果と課題

本校国語科では、昨年度までの3年間、「言葉に対する捉え方を更新していく授業の創造」を主題として研究を行ってきた。

本校生徒は、与えられた課題や活動に対して意欲的に取り組む生徒が多く、国語科においては、特に対話を通して自己の考えを広げたり深めたりすることの有用性を見出し、積極的に話し合いを行おうとしていることから、研究の成果は挙がっていると判断している。具体的には、成果として次のような点を挙げるができる。

○「学習課題設定の工夫」「言語活動設定の工夫」「交流の活性化」の3点について生徒が言葉を捉え直す「更新」が行われていたことに一定の成果が見られた。

○ノート、ポートフォリオを用いた思考等の可視化を実現できた。

○振り返りシートの活用によって思考の深化を進めることができた。

一方、課題については、昨年度研究の集約で、

▲「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関し、「粘り強さ」・「学習調整力」をどのように見とり評価に繋げていくか、内容と方法が開発されていない。」

としている。来年度には新学習指導要領が全面実施となることから、その評価の内容や方法の開発については、まさに今年度末までの全国的な課題であると考えられる。

加えて、全国学力・学習状況調査は今年度実施されなかったが、本校独自に行った質問紙調査の結果において、次のように「学校での学び」と「実生活で生かされる力」の結びつきが弱い、という結果も出ている。

・「国語の勉強は大切だと思いますか。」に「当てはまる」と答えた生徒が55.3%であった。

・「国語の授業で学習したことを、普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか。」に「当てはまる」と答えた生徒の割合は34.9%であった。

これらのことから、

- ① これまで培ってきた言葉によって交流し、自分の考えを更新し、新しい問いを持って学びを進めていこうとすることによって、知を更新していく「知識・技能、思考力等、意欲等」(共有する力)にさらに磨きをかけ、未来を創造する知の産出方法を身に付けさせること。
- ② 国語科における学びに向かう意欲を活性化させ、自己調整を行いながら、粘り強く学び続ける担い手を育てること。

という2点の課題を新研究の出発点に据えることとした。

2 本校国語科が求める方向性と研究内容

前年度までの成果と課題を踏まえ、次のような取組を通して言語能力の定着と充実を図り、もって未来の創造と学びに向かう力の育成につなげたい。

(1) 言葉の捉え方を更新する授業の定着と充実

- ① 言葉によって未来を切り拓く力をつけるため、強い目的意識を持てる課題解決的な単元を開発する。また、その学習過程の中に、知識や技能を自在に駆使し、力を発揮できる場を設定する。

これまでも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところであり、生徒達は積極的に交流を行い、言葉を更新していく様子も見られることから、一定の成果が上がってきていると判断している。しかし、これからは、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力の観点から、より目的意識を持ち、他者と協働して課題を解決することができる言葉の力や、自らの学びの姿を見直して、学びの質を高めることができる力が求められている。

具体的には、まず、生徒が主体的に考え、動き出したいくなるような、生徒の生活の文脈に近く切実な判断や対応が必要となる課題や、知的好奇心を刺激することができる課題を設定したい。さらに、この課題は、学習者自身と他者が、それぞれに持つ知識や経験を引き出し合うことで解決していく必要があるもの、つまり、協働を通じた解決が必要となるものとし、国語科でこれまでも積極的に取り入れてきたワールド・カフェやジグソー学習などをさらに深い学びにつながるものとした。また、その方法的良さに気付き、課題解決のために自在に用いることにもつなげていきたいと考えている。

加えて、新たに導入するGoogle work spaceのようなテクノロジーの力を活用して、教師と生徒がこれらの学びの過程をともにモニターし、それぞれの「粘り強く取り組む姿」や「学習調整を行う姿」を伸ばしていく「学びの最適化」も図っていききたいと考える。そして、これらを、これまで研究の重点としてきた「学びを通して学習者が、自身の言葉の認識を更新していくこと」にも生かすことで、学びは一層重層的なものとなり、生徒が自身の未来を切り拓くことができる言葉の力を身に付けることにつながると考えている。

- ② Google work space上に語彙を蓄積することによって、豊かで洗練された語彙の獲得を目指す。

言葉の捉え方を更新していくために、豊かで洗練された語彙の獲得は必要不可欠である。

Google work spaceを利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留めていくようにしていきたい。討論会やビブリオバトルなどを開催し、新たな言葉を積極的に取り入れていく方法を実践し、「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。

まず蓄積するときに、どのような言葉なのかを辞書で調べ、感情を表す言葉や、動作を表す言葉など意味を分類して保存していくことにより、言葉の意味だけを理解し、蓄積していただくだけではなく、自分の言葉として使えるものにしていきたい。さらに授業や日常の中で単独で獲得していく言葉と、作品の中で出会う言葉を整理し、どのような場面で使うことができる言葉なのかをGoogle work space上で紹介するなど、獲得したもの同士をつなげたり、関連させたりすることにより、日常の授業や生活の中でも使う練習を行っていく。

例；Google work spaceを利用した語彙学習，Word Bankの作成と積み上げ，ビブリオバトル等の実施

(2) 言葉の主體的な学び手育成を目指す学びのデザインの開発

学びのプロセスモデル国語編							
	見通し		学習活動				振り返り
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
エンゲージメント	・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。(認知・行動) ・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。(感情)	・ゴールを設定し、課題解決のための学習方略を考える。(認知) ・過去の学習経験を生かそうとする。(認知)	・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動)	・自らの学びの効果を振り返る。(認知) ・自らの学習方略を調整する。(行動)	・必要に応じた学習方略を修正する。(認知) ・学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。(認知・行動)	・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・調整された学習方略に基づき、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動)	・自らの学びの質や成果を振り返る。(認知・行動) ・学ぶ面白さや楽しさを感じる。(感情) ・有能感や充実感をもつ。(感情)

《主體的な学びのプロセスモデル国語編》

① 言葉の主體的な学び手の育成

(1) 自己調整力の育成

生徒が主體的に言葉を探求していくためには、自分の学びがどれくらいうまく進んでいるのかを振り返り、調整する「メタ認知」が必要である。目標設定の場面ではまずどのような目標を設定し、方略計画を立てていくが、そこには課題への興味が第一である。そこで本校国語科では学びのデザインとして、単元やつけさせたい力に応じてどのような言語活動を設定し、上の表に当てはめてどのような見通しを持って学習者に「自らが動き出したい課題」を設定し、教師が「学びのプロセスモデル」を意識して計画と遂行していく必要がある。また学習活動を行っている際に形成的評価と方略調整を行うことによって、遂行のコントロールを行う「自己調整」が必要となる。そこで指導者は学習過程の中に待つ時間を生み出し、生徒自身に再計画の時間を保証することを試みたいと考える。また仲間との交流によって自分の学びの達成度や、現状を把握して、問題点をメタ認知しその方略を修正することによって、見通しからの再計画を行う。さらにその計画を遂行し、最後に自己省察によって目標を達成できたかということを総括的評価するというサイクルを作ることによって、主體的な学びを実現させたい。

(2) 粘り強い取組を行う力の育成

主體的な学びのもう一つの側面は粘り強さである。学習調整と一体となって現れることもあるが、授業内の発言や活動の見とりだけでは不十分である。そこで記述したもの必ず単元の中で毎時間の学習を振り返る時間を作り、「振り返りシート」や「ポートフォリオ」に記述させることを通して、その側面を見とりたい。学習の課題に対し諦めずに何度も取り組もうとしているかどうか、また自己調整を行った後にさらに課題に取り組もうとする姿勢が見られるかどうか。学習後にも、その単元の目標に対して出した自己の課題を次の学習に生かすことができるような記述ができたか、努力の過程とその頻度を見とりたい。

3 研究を支える取り組み

(1) SELF (総合的な学習の時間) との関わり

本校では、「総合的な学習の時間」における探究的な学習についても研究を重ねている。1年生から3年生まで、探究的な学習を系統的に配置し、発達段階に応じたカリキュラムを組み、最終的には生徒個人で探究できるだけの力をもつことを目標に、全職員で指導に当たっている。その過程の中で、総合的な学習の時間において生徒に身に付けさせたい資質・能力として挙げている「課題設定能力」「情報収集能力」「情報選択(分析)能力」「表現力」「自己省察力」を、各教科との連携を図りながら身に付けさせるため、教科横断的な学習を意識した年間指導計画を作成している。国語科においても、国語科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で活用できるように、また、総合的な学習の時間で身に付けた力を国語科の授業においても活用できるように、関連性を図りながら授業を展開することを意識している。

(2) ファシリテーションスキルとFUZOKUワークシート

今年度の国語科の研究では、生徒に“言葉で世界を認識する力”，“ファシリテーションスキル”を身に付けさせることを目標としている。まず，“言葉で世界を認識する力”を育むため，“語句・語彙力”の育成を目指す。本校ではこれまで、言語感覚を働かせることの有用性を生徒が感じるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるために、言葉の価値や実生活における有用感に気付かせるところから始めるため、全学年を通し、新聞記事を活用した「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んできた。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、より豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。本年度は特に、「言葉」の力の基盤である語句・語彙力を育むため、生徒が新しい時代に生まれた新しい言葉や、出会ったことのない言葉に注目し使いこなしていくことを目指し、語彙の獲得を意識した問題作成を心がけている。新聞記事の内容については、文学的な内容、社会的な内容、理科学的な内容など幅広く取り上げ、新たな語彙を「Word Bank」に蓄積するなど全学年、全教科での学びを支える土台作りを目指していく。

次に“ファシリテーションスキル”では特に、「対話」の質を向上させていきたい。コミュニケーションの方法が多様化していく社会の中で、新しいファシリテートの力が求められている。ただ意見交流を行うのではなく、交流の目的を意識させること、相手の意見を受容するだけでなく建設的な話し合いとなるように問い返したりすること、目的を果たすために誰のどの意見が有効であったか意識すること、どのようなまとめ方をすれば良いのかを工夫すること等、生徒が意識できるような対話を目指したい。

4 研究経過

本年度の国語科の実践として、事前研究会と中等教育研究会を挙げる。

①事前研究会

授業者 若尾 大樹

【単元名】 後輩に向けて「令和版『論語』」を作ろう ～言葉を粘り強く吟味する活動を通して～

【キーワード】 「粘り強さ」 「自己調整」 「解釈」 「Google Workspace」

【授業の概要】

『論語』は、時代が変わっても変わることのない人間の生き方に関する含蓄ある孔子の考えが収められている。孔子の人間の生き方に対する鋭い観察や深い思索にふれ、現代に生きる自分たちの考え方や生

き方と比べることによって、言葉の本質を捉えさせる。特に、『論語』の言葉を自分で解釈し、自らの学校生活を結びつけることで価値づける活動を試みた。さらに、中学校3年生としての責任感を刺激し、強い課題意識を持てるような言語活動を設定した。

同じ学校に通う後輩やこれから入学してくる未来の後輩に向けて言葉を残すためには、論語の言葉に用いられている一つ一つの言葉について正しく捉えるとともに、自分の解釈を加える必要がある。生徒は自分の解釈の正確性や自作の『論語』で用いた言葉の妥当性を何度も吟味することによって、古典の言葉が自分のものになるという実感をさせることを目指す。

1. 単元目標

- (1) 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。
〔知識及び技能〕(3)ア
- (2) 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)イ
- (3) 言葉が持つ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。
「学びに向かう力、人間性等」

2. 本単元における言語活動

論説や報道などの文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめたりする活動。
(関連：〔思考力、判断力、表現力等〕C(2)ア)

3. 教材名 学びて時に之を習ふ―「論語」から (光村図書出版「国語3」)

4. 指導の内容と言語活動，教材の関わり

(1) 言語活動設定の意図

『論語』は多様な解釈が可能な書物である。それは孔子の英知と事象を捉える概念が複雑に絡み合っていること、さらには読み手の経験や感性によって捉え方が変わってくるのが原因だと考えられる。本単元では言葉の使われ方や『論語』の言葉の構成に着目し、孔子の思想に迫り、自分自身のこれまでの生活と照らし合わせることで古典に現れる見方、考え方を広げることを目的に展開していく。今回、生徒は自分の中学校生活の具体的な場面を生徒に想起し、『論語』の世界と結びつける。そして、古典を読む意義を実生活と関連させることで、学びの意欲を高めたいと考える。具体的には、後輩に『論語』の言葉を自分の解釈にあった形に変えた、令和版『論語』として残す活動を行う。先輩としての責任感から、強い課題意識を持ち、活動に取り組むことをねらう。また、令和版『論語』で用いた言葉が自分の体験と合致しているかどうか協働学習の中で何度も吟味することで、主体的に粘り強く学習に取り組む態度を育む。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

- ① 学習活動に価値を見出し、自らの生活に関連づける学習活動
- ② 協働的な活動を通して、言葉の使い方を吟味する学習活動

(3) 意識させたい「言語意識」

【5つの言語意識】

- ・目的意識 これからの学校生活で持つ疑問や悩みを解決できるように、

- ・相手意識 附属中学校の後輩に向けて、
- ・場面意識 自分の言葉で「論語」を解釈する場面で、
- ・方法意識 言葉の使い方を吟味することを通して、
- ・評価意識 「論語」に現れるものの見方、考え方を生かして、令和版「論語」を作ることができる。

5. 指導計画と評価計画（C領域「読むこと」5時間）

（1）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。(3)ア)	①文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。(C(1)イ)	①「論語」の言葉をつかむために何度も吟味し、自らの解釈で「論語」の言葉を捉え直し、まとめようとしている。

（2）学習過程の概要

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価の方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ・本単元の学習の流れや本単元で身に付ける力についてについて知る。 ・教科書の「論語」の一節を訓読し、基本的な漢文の知識を確認する。 ・教科書P29「学びて時に之を習ふ」以下の言葉を、語注をもとに現代語訳する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「論語」や「孔子」の考えが、人間の生き方について言及されたものであること、2,500年も前から、今も読み継がれていることを確認し、自分たちも、附属中で学ぶ先輩として、後輩たちに言葉を残すため活動であることを伝える。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[知識・技能]① 観察・ワークシートの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の成立や孔子の考えをもとに、「論語」の本質について理解しているかを確認する。 </div>
2	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が解釈を加える言葉を選び、漢和辞典を使いながら、その意味を列挙する。 ・自分が3年間の中学校生活で感じた疑問や持った悩みについて想起し、具体的な体験を書き記す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解釈する言葉の候補をできるだけ多く挙げさせる。 ・解釈の根拠となる部分なので、短くても良いので、できるだけ詳しく書かせる。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ言葉を解釈する者同士グループに分かれて、孔子の言葉の意図について確認する。 ・自分が解釈を加える言葉を選び、具体的な体験と結びつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の解釈と構成に着目して大意を捉えさせる。 ・自分の体験を含む文章をできるだけ具体的にワークシートに記入させる。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[主体的に学習に取り組む態度]① 観察・ワークシートの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」での言葉の使い方について、グループで吟味し、自分の体験との関連を確認する。 </div>

4 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に書いた自分の体験をもとに、令和版『論語』の第一案を考える。 ・グループで第一案を交流し、評価し合う。 ・グループの交流を生かし、第一案を吟味する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の解釈の観点と構成の観点から複数箇所、変更しても良いことを伝える。 ・アドバイスのポイントを示す。 ・良い部分と改善できる部部の両方をアドバイスさせる。 ・試行錯誤した様子を残すようにさせる。 	<p>[主体的に学習に取り組む態度]①</p> <p><u>観察・ワークシートの記述</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の体験を元にした令和版「論語」の言葉の整合性を何度も吟味しているかどうかを確認する。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・令和版「論語」を発表する。 ・「論語」の言葉と自分が考えた言葉を比較し、考えたことを話し合う。 ・話し合いを参考にして、自分の考えをワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第4時までまでにまとめたワークシート等を根拠にして、自分の考えた言葉について発表し、相互に評価をさせる。 ・「弟子に向けた人生の指針となるもの」としての『論語』と「附属中の後輩に向けた中学校生活の指針となるようなもの」としての令和版『論語』の違いについて話し合わせる。 	<p>[思考・判断・表現]①</p> <p><u>ワークシートの記述</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の言葉に現れる考え方を、自分が解釈した言葉に反映させられたかどうかを確認する。

《本授業における学びのプロセスモデル国語科編》

学びのプロセスモデル国語科編							
	目標設定	方略計画	遂行	振り返り	方略調整	遂行	振り返り
エンゲージメントの高まり	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの古典の学習が生活に役だったかどうか振り返り、古典を学ぶ意味について認識する。 ・先輩として、後輩へ言葉を残すという言語活動をイメージし、学習への期待感を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような道筋で令和版「論語」を作っているかを理解し、単元を通して身につける「読むこと」の力を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の「論語」の言葉を自分の学校生活と結びつけて解釈し、自分の解釈を加えた新たな言葉について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間からもらったアドバイスをともに、自分の伝えたい考えが、自分の選んだ言葉で表現できているかどうか検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りでの検討の結果、どの言葉を吟味する必要があるかについて再考する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・方略調整を行った後、自分の体験に基づいた言葉に再び自分の解釈を加え、あらたな言葉について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の言葉に現れる考え方を、自分が解釈した言葉に反映させられたかどうかを確認する。

6. 成果と課題

『「方略調整」や「粘り強く学習に取り組む」とはそもそもどういうことなのか』という疑問が生徒の中にあるため、日常の授業の振り返りや言語活動の見直しの必要性を感じた。また、生徒の振り返りの記述から、生徒の中に「方略調整」＝「意見を変えること」、「意見を変えること」＝「良いこと」というイメージが存在している可能性があることを感じ、方略調整の在り方を検討する必要があることを痛感させられた。

最大の課題は、C領域の「精査」の部分で自己調整を行う必要があったが、B領域に近い部分での自己調整を行わせてしまった点である。読むことの自己調整を働かせるのであれば、最終的に孔子の言葉に戻って精査する必要があった。《事前研究会記録より》

②中等教育研究会

授業者 那須 正和

【単元名】 撰者になって、私たちの歌集を作ろう ～短歌の表現を吟味する交流を通して～

【キーワード】 「私たちの歌集」 「語彙の拡充」 「ワードバンク」 「Googleworkspace」
「効果的な表現」

【授業の概要】

学習指導要領「読むこと」の言語活動例に「詩歌を読んで理解したことを引用して解説すること」が採り上げられている。本単元では、教科書などに出てくる作家の短歌から学び、なぜ名歌と言われるのか、作家が歌に込めた表現を自分なりに解釈し探求させたい。その活動を通して作家の見方や考え方に触れ、優れた表現が短歌全体にどのように生きていて、その主題は何かについても考えを及ぼしたい。さらに既習の知識と関連させ、そこから「自分たちの歌集」を作るために、自分のクラスの学級目標にそって生徒が選んできた短歌が、どのような点で優れた短歌なのかを考え、効果的な表現が短歌のどの部分に表れているのかを説明させたい。さらに選んだ短歌をGoogleworkspaceのジャムボード1枚にまとめさせ、他の仲間が短歌をどのような視点で選んだのかを交流させ、選んだ短歌が本当にクラスの歌集として載せるのにふさわしい歌なのかを生徒の交流から吟味させたい。

1. 単元の目標

〔知識及び技能〕

- (1)エ 抽象的な概念を表す語句の量を増やすとともに、話や文章の中で使うことを通して語感を磨き語彙を豊かにすること。
〔思考力、判断力、表現力等〕
- C(1)エ 表現が、文章の内容を伝えたり印象付けたりする上で、どのように働いているかを考えることができる。
- C(1)オ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
「学びに向かう力、人間性等」
言葉が持つ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする態度を養うことができる。

【言語活動例 中2】

- Cイ 詩歌や小説などを読み、理解したことや考えたことを説明したり文章にまとめたりする活動。

2. 教材名 栗木京子「短歌に親しむ」(光村図書出版「国語2」)

3. 日常の取組

○学びのプロセスモデル国語科編を意識させる

生徒に学習活動を意識させることは、授業に対しての構えをつくらせることができる。

「気づく→目標を設定する→学習する→再考する→深める→振り返る」という小さな学習サイクルを計画的に仕組む。また、「振り返り」ではポートフォリオを使って、学習活動を振り返り、学習を通して自分の考えの変容や身に付いた力を言語化して振り返ることができるようにしている。

○交流を取り入れた授業

ファシリテーションの考え(他者との協働による知的相互作用の促進)を取り入れ、日々の学習の中で、自分一人で学習を完結させるのではなく、自分の考えを深めるために対話(他者との交流)を通して、自分の考えを再構成することができるようにしている。

考えを広げる話し合い、考えをまとめる話しあい、さらに深く探求するための話しあい、など目的に合わせて様々な交流の仕方を行い生徒自身で課題に向かう力をつけていく。

4. 指導の内容と言語活動、教材の関わり

(1) 言語活動設定の意図

本単元では、短歌に詠み込まれた情景や作者の心情がよりいきいきと伝わってくる表現を「効果的な表現」とし、言葉を根拠に短歌を解釈し、選んだ言葉が作品にどのような影響を与えているかについて感じたことや考えたことをまとめることを中心に指導することとした。言葉の一つひとつから情景や心情を想像したり表現の効果を考えたりする交流を通して、名歌から抽出した表現をもとにして「私たちの歌集」の撰者になってなぜこの歌を選び、歌集に入れるのかを吟味する活動を行いたい。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

- ・ 教師による教材研究(伝統的な文芸としての短歌)と生徒の言語感覚とをつなぐ活動の設定。
- ・ 交流の必要性を生徒が感じる学習課題、そして活動を意図的に仕組むことで、生徒の主体性や他者との交流の有用性が高まる活動として、以下の活動を設定した。

① 短歌と学習者との距離を縮められるようにする学習活動。

→ 他者との共有によって自分自身が感じた短歌や言葉の魅力を伝え合う活動。

短歌は31音に作者の思いや様々な魅力が込められている。そこでその魅力を探ることを行い、なぜこの短歌は素晴らしいと感じるのかという魅力を探り、その魅力を仲間を紹介することを通して短歌の面白さや、ひいては言葉の広がりや奥深さに気が付くことができるような活動とした。

② 「ワードバンク」を使い、語彙の拡充と言葉を吟味する学習活動。

→ 本校国語科として年度当初から「ワードバンク」という言葉をクラウド上に蓄積し、自分で作る言葉の辞典として使ってきた。自分自身が名歌にふれた際に新たな言葉と出会い、その言葉の表面的な意味だけではなく、隠れた思いなどについて深く探り、様々な使われ方や方法にも着目して言葉と向き合い、自らふさわしい言葉を選ぶことができるように言葉を吟味する活動を仕組んでいきたい。

(3) 意識させたい「言語意識」

【 5つの言語意識 】

- ・相手意識 仲間や学級担任に対して
- ・目的意識 名歌に込められた表現をもとに短歌を選ぶために
- ・場面意識 自分がどのような意図でその歌を選んだのかを考える場面において
- ・方法意識 自分が選んだ短歌を他者と交流することを通して
- ・評価意識 表現の効果を明確にして短歌を選ぶことができたか。

(4) 全体研究との関わり

①「言葉による見方・考え方」を働かせる学習課題の設定

本校の国語科として捉える「創造性」とは、言葉による見方・考え方を働かせることによって未来を想像する力、である。そのために生徒が主体的に言葉を捉えたり、捉えなおしたりすることが大切になってくる。そこでエンゲージメントの高まりを目指して、言葉を表面的なものとして獲得することだけでなく、作品の中で出会う言葉を大切にし、その言葉の背景にある作者や時代背景、などにも考えを及ぼし捉えていきたい。

②主体的に学習に取り組む態度の評価

そこで主体的に学習に取り組む態度の評価規準を「短歌の表現を深く考えるために、自分たちで課題を決めて交流しようとしている。」とし、「おおむね満足できる」状況のBの生徒の姿を以下のキーワードを示して具体的に想定した。

【キーワード】「主題に迫る効果的な表現」

①課題について考えを持つ。②自分が取り上げている表現は作品の全体にどのような効果を与えているのかを交流し、意見を出し合う。③試行錯誤しながら自分の考えを再考する。

これら①～③の過程を交流の場面とワークシートから見取る。

本時の目標を示し、見通しを持たせる。毎時間の振り返りを記述させ、「この時間に身に付いたこと」「この時間で分からなかったこと」「次の時間の課題」などを書かせ、試行錯誤の回数と考えの変容を書かせる。全体研究との関りとして学びのプロセスモデルを国語科として以下のように設定し、エンゲージメントをどのように系統立てて見とっていくのかを考え、特に「主体的に学習に取り組む態度の評価」を形成的評価、方略調整、総括的評価という3段階で粘り強さと自己調整をする姿を見とりたい。

5. 指導計画と評価計画（ C領域「読むこと」49時間中の6時間 ）

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考力, 判断力, 表現力	主体的に学習に取り組む態度
① 「短歌に親しむ」の学習を通して、抽象的な概念を表す語句の量を増やすとともに、話や文章の中で使うことを通して語感を磨き語彙を豊かにすること。 (C(1)エ)	① 「読むこと」において、「短歌に親しむ」「短歌を味わう」に出てくる作家の短歌を読み、短歌の理解を深く行うために表現に込められた作者の意図や背景などに着目することで読みを深めることができる。(C(1)エ) ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、短歌を深く読むことができる。(C(1)オ)	① 「私たちの歌集」を編纂するために、根気強くより良い短歌を選び、なぜその短歌を選んだのかについて課題を決めて交流し、粘り強く課題を解決しようとしている。

(2) 学びのプロセスモデル国語科編

学びのプロセスモデル国語科編

エンゲージメント	見通し	学習活動					振り返り
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
	<p>・今までの文学的文章の読みを参考に、一つの表現の多様性や、言葉に着目することで、見えてくる世界があることを確認する。</p> <p>・文学館館長先生に短歌の読み方と創作についてご講義いただく。</p> <p>(認知・行動)</p> <p>・短歌の読み方を活かして「私たちの歌集」に載せる短歌を選ぶという課題を設定する。(感情)</p>	<p>I, 短歌の読み方を知り、短歌の疑問に思ったことや批判的に読んだ表現に着目して探る。(認知)</p> <p>II, 歌集のテーマを理解し、テーマに合う歌を選ぶ。</p> <p>III, 仲間が選んだ短歌と比較、検討する。(行動・認知)</p>	<p>・短歌の読み方のモデルを示し、観点を明確にして読み、短歌の表現について考える。</p> <p>(認知)</p> <p>・短歌を分担し、短歌を深く探り、短歌の中から自分が選んだ表現の効果を全体で共有する。</p> <p>(行動)</p>	<p>・テーマに則って短歌を選び、なぜその短歌を選んだのか。観点を明確にさせておく。</p> <p>(認知)</p> <p>・選んだ短歌を小グループで交流させ、どの歌を歌集に載せるのかを観点を明確にして話し合う。</p> <p>(行動)</p>	<p>・自分たちが選んだ短歌は本当にクラスのテーマに合っているのか。学んできたことが取り入れられているのかをもう一度考える。</p> <p>(認知)</p> <p>・ジャムボードで他の班の短歌を見てもう一度吟味する。</p> <p>(認知・行動)</p>	<p>・自分たちが選んだ一首を出し合って最後の編集会議を全体で行う。</p> <p>(認知)</p> <p>・全体交流の場面で多くの意見を聞き、考えを深める。</p> <p>(行動)</p>	<p>・「自分たちの歌集」を読み合い、お気に入りの短歌にコメントをする。</p> <p>(認知・行動)</p> <p>・さらに良い短歌を選ぶために大切なことについて考える。</p> <p>・着目した表現が次の読みにつながるという有能感を感じる。</p> <p>(感情)</p>

6. 授業の計画(単元構想表)

		学習活動	評価
事前		<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元全体の流れを理解し、本単元の学習の見通しをもつ。 ○ 新出漢字、新出音訓については事前学習。 ○ 山梨県立文学館館長三枝先生より短歌の読み方についてご講義いただく。 <ul style="list-style-type: none"> ・短歌を読む時にどのような点に注意して読むべきかを考えておく 	[知識・技能]
第一次	1時 【精査】	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文章を通読する。 <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの歌の読み方を確認する。 ・繰り返し音読をする ○ 「短歌を味わう」に出てくる短歌に関する基礎的な知識について確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習班4人で短歌を分担する。 ・それぞれの短歌に対して疑問点などを挙げ問いを立てる。 ・それぞれの短歌の表現について考える。 	[知識・技能] [[思考・判断・表現] ①

		<p>①表現技法（体言止め・区切れ） ②助詞の使い方 ③語句の意味 ④作者について ⑤時代背景</p> <p>・便覧なども参照し理解を深める。 ・図書館の本やインターネットを参考にする。</p>	
第二 次	2・3時 【精査・解 釈】	<p>○ 「短歌を味わう」に出てくる作家の短歌を交流させる。</p> <p>・自分で調べた短歌について交流し、他者の考えを聞いて歌のエッセンスについて考える。（ジグソー交流）</p> <p>・ホームグループで考えたことを共有する。</p> <p>・短歌の読み方についてどのようなことに着目すると短歌良さが見えてくるのかを全体で確認する。</p> <p>○ 「私たちの歌集」編纂のために短歌を集める。</p> <p>・各クラスのテーマ</p> <p>1組「LETS WALK TOGETHER」 共に 歩み ； 2組「星空 ～2組らしく輝け～」 輝き 個性、 3組「百花繚乱」 個性の輝き 花 ； 4組「SUNNY」 明るさ 太陽 自然、 のテーマに沿った短歌を集めてくる。</p> <p>・選んだ句（3首）がなぜ自分の心に響いたのかをジャムボードにまとめる。</p> <p>・選んだ歌の解説書を書き、着目した表現を仲間に紹介できるようにする。</p> <p>・解説書を書くためにワードバンクを使い、さらにワードバンクに入れることができるものを書く。</p> <p>○ 小グループでそれぞれの短歌の魅力について発表する。</p> <p>・調べたことを発表するのではなく、選んだ短歌の効果的だと思った表現が、どのように短歌に活かされているのかを発表する。お互いにジャムボードの付箋機能を使って、表現に着目して意見を出し合う。</p>	<p>〔主体的に学習に取り組む態度〕①</p> <p>〔思考・判断・表現〕①</p>
第三 次	4・5時 【考えの 形成・共 有】	<p>○ 「私たちの歌集」の編纂を行う</p> <p>・前時に交流で意見をもらったものを参考にして、3種から1首にしぼり、ジャムボードにまとめる。</p> <p>・どの短歌を「私たちの歌集」に載せるのかを決め、解説書をもう一度読み合う。</p> <p>○ できた歌を全体で読み合い振り返りを行う。</p> <p>・完成した歌集をみんなで読み合い感想を述べ合う。</p>	<p>〔主体的に学習に取り組む態度〕①</p> <p>〔思考・判断・表現〕②</p>

7. 授業のまとめ

今回の授業では事前授業ということで、歌人で山梨県立文学館館長三枝昂之先生をゲストティーチャーにお招きし、「短歌の読み方・創り方」をご講演いただいてから、授業に入った。本単元の振り返りの

中に「一つの表現に着目することで、短歌の作者がこの歌に込めたかった主題を知り、奥深さと31音の奥深さが見えてきた」や「読んだことを生かして自分でも日常生活の感動などを短歌を詠んでみたい」といった意見が多くあった。そこで授業後の発展として生徒たちは短歌を実際に創作し、フォーム上で自分が創った短歌を送り、教師がまとめたものを三枝先生にお願いして見ていただいた。その中で優秀だった短歌を何首か二度目のご講義の中で鑑賞したり、解説して頂いたりするなかで、言葉選びの素晴らしさ、言葉を通して広がる世界の興味深さを実感し、短歌を身近に感じることでできたのではないかと考える。

さらに今後の課題として短歌の創作の時などにワードバンクを使うことを行ったが、なかなか日常生活の中で得た言葉を使うことができない生徒が多かった。そこでどのような形で言葉を集めるか。また集めたものを日常の活動や必要な場面とどのように関連付けるかということを指導し、積極的に使える語彙の拡充に力を入れる必要を感じた。

【本年度の国語科の実践の成果と課題】

今年度の実践は2つの研究授業をC領域「読むこと」で行った。教科総論にもあるように言葉を通して新たな世界を想像するために、言葉による見方考え方を働かせ生徒自ら、また協働的な交流によって新たな世界を見出すことができた。しかし、公開研究会でも指摘された通り後半の「クラスの歌集を編む」場面においては、ダブルスタンダードとなり、「表現に着目すること」と「クラスのテーマに合わせた歌を選ぶ」という基準になり、やりたいことが拡散してしまった。主体的学習に取り組む態度の評価についても粘り強さと自己調整という2つの側面を単元の中で主に評価する時間を設定し、評価の実際を行ったが、評価の客観性を考えあわせてどのような基準で評価するのか、さらにどのような記述が振り返りや「撰者より」から出てくればAかなどの基準を設けることの難しさや、その評価の客観性や生徒自身がメタ認知できるのかといった課題が出された。

【Word Bank】の取り組み

Google work space を利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留める取り組みを行っている。新たな言葉を積極的に取り入れていく方法を実践し、「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。今年度の反省として、言葉の蓄積には附属ワークシートなどの取り組みによって一定の成果が出たが、その使用を念頭に置いた使える言葉の広がりという面が課題となる。そこで単元の中でも振り返りと同時に言葉の振り返りも同時に行い、日常の中で使うことのできる生きた言葉の獲得を目指したい。

まず蓄積するときに、感情を表す言葉や、動作を表す言葉など意味を分類して保存していくことにより、言葉の意味だけを理解し、蓄積していくだけではなく、自分の言葉として使えるものにしていきたい。さらに授業や日常の中で単独で獲得していく言葉と、作品の中で出会う言葉を整理し、どのような場面で使うことができるかなどより良い活用法についてさらにブラッシュアップして考えていきたい。

【参考文献】

文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 2018
文部科学省 国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 2020
山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要 2017-2019
鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房 2013
鹿毛雅治『授業という営み——子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版 2019
第3期教育振興基本計画 2018